

私の終戦70周年

赤道直下での空腹と苦役

春日滄太郎 東京都世田谷区

今年には終戦から70年を迎え、南方第一線からの生き残りの兵は皆90歳を過ぎました。人生の節目と思い、私の戦争体験の記憶を手繰り寄せてみました。

●南方方面軍としてスマトラへ

私は大正11年、長野県屋代（現千曲市）で生まれ、物心ついた時は父の勤務先の中国の大連において、6歳まで育った。

昭和18年4月10日、相模原の東部88部隊（近衛電信第一聯隊の留守部隊）に現役兵として入隊した。諸訓練後、士官候補生内定中、優等生の2人が教官候補に残り、第一線補充兵として約100名と8月16日、他の諸部隊とともに、広島県宇品港を出航した。我々100名は昭南島（シンガポールエンパイヤードッグ入港）を経由して9月23日パタンパンジャンの電信第一聯隊（旧オランダ軍兵舎）に入隊した。

その後、シンガポールに戻り幹部候補生として南方軍教育隊に入隊。ビルマ、ニューギニア方面軍からの候補生と共にマレーシア、シンガポール地域でマレー作戦再現等の戦闘作戦な



見習い士官任官（22歳）
シンガポール・ラッフル
ズホテルにて

ど諸教育を修了し、昭和19年9月に見習士官に任官した。

スマトラ近衛電信第一聯隊に着任し、軍の通信脈絡を担うことになった。スマトラ当時掌握した部下はシンゴラ上陸からの精鋭たちであったことも思い出す。

さて南方方面軍・第25軍は、山下奉文（注1）軍司令官のもと、近衛（このえ）師団、牟田口（むたぐち）兵団、近衛電信第一聯隊が主力で、昭和16年12月8日、マレー半島シンゴラに上陸し、17年2月15日シンガポールを制圧後、スマトラ島パレンバンに落下傘降下し、石油資源を確保する任務に就いていた。（注2）

その後、第25軍の司令官は田辺盛武中将に代わり、配下の牟田口兵団はビルマに転進し、近衛師団とわれわれ近衛電信第一聯隊がスマトラに上陸した。そのことで、インドネシアは300年にわたるオランダの植民地支配から解放されたのである。

●終戦を迎える

終戦時、私は23歳。陸軍少尉、近衛電信第一

聯隊 第一中隊、第三小隊長であった。この小隊は4個分隊の64名、インドネシア兵補10名の計74名、軍用トラック5台、の編成だった。軍司令部のブキチンギからパレンバン方面とタカンバル方面の通信線補強と構築を終了して、その日はインド洋岸のパダンに駐留していた。従来の南方軍の作戦は、上陸してくる敵を海岸陣地で叩く水際撃滅作戦をとってきたが、昭和19年以降は、敵の上陸前の艦砲射撃、空爆撃が猛烈を極めたので、上陸してくる前に海岸陣地は吹き飛んでしまった。そのため、私の小隊は赤道標を越えたインド洋岸のパダンの海岸陣地から、艦砲の届かない30^キ後方の山岳地帯の洞窟陣地に通信網架線を構築中であつた。

8月15日、暑い、暑い日だった。正午12時、ちょうどヤシの木の下で昼飯をとっていたときだった。200^キ離れたパタンパンジャンの中隊本部から作戦中止の緊急電話が入った。日本への原爆投下やソ連参戦の情報を得ていたので、あらかじめ覚悟はしていた。来るべきものが来たのだ。2日置いて聯隊本部に帰還した。

●捕虜収容所に向かう

9月に入って自給自足体制準備のため、20^キ離れたマラピ山麓のバライガダンに移駐した。

(マラピ山は標高2891mの活火山で、現在、山麓はマンデリンコーヒーの産地として知られる)

やがてスカルノ軍の独立戦争が始まり、オランダ軍は撤退した。連合軍の命令により、治安維持の名目で我々は再武装した。

翌21年1月15日、英軍から日本帰還のための駐屯地設営隊のシンガポールに移駐命令。第25軍先遣隊に電信第一聯隊からは、私の小隊(70名)が先遣隊要員として、上田稔聯隊長(男爵・陸軍大佐)はじめ、各中隊長と衛兵所のラツパと捧げ銃に見送られてトラツクに分乗した。そして第25軍駐屯地のブキチングの第25軍先遣隊長の濱田少将の指揮下に入った(総勢500名)。

英軍指示の転進装備は将校は軍刀と拳銃、兵は銃剣のみ携行し、マレー半島のバトパハ上陸までに銃剣と拳銃はマラツカ海に投棄して上陸のこと、との命令だった。

この日、スマトラから赤道標を戻ってパカンバルで乗船、シアク川を下ってマラツカ海を越え、マレーシアのバトパハに上陸した。クルアン飛行場の検問所で、戦犯検査を受けた。軍刀を英軍に渡して、英軍トラックで小隊とともに200km先のシンガポールに夕刻着いた。そこ

はリババレーの元英軍の捕虜収容所跡だった。●過酷な労働を支えた合言葉

抑留となつてから屈辱と空腹と苦役の労働が続いた。「壊したものは、負けた者が直していい」の論法で、我々日本兵が作業にあつた：

鬼のテンガー(旧飛行場跡)、魔のリババレー(旧英軍捕虜収容所跡)といわれ、過酷な作業をさせられた。抑留部隊は「作業隊」と称し、日本に復員するまで軍隊組織を維持していた。作業場へは小隊単位で2列縦隊となつて、整然と行進していった。前後左右にインド兵が監視についていた。道路脇や後方から罵声とともに、小石や使えなくなった軍票が投げつけられた。我々もインド兵もそれを意に介さず、目もそらさず、黙々と行進した。インド兵は我々捕虜の



中部スマトラ・コトアラムの赤道標
白い球に赤い帯が描かれている。山の中腹で、周りはジャングルだった(昭和18年8月)

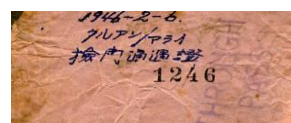
監視であり、同時に護衛でもあつたように思う。昭和21年2月頃のことであった。作業の監督は主として豪州兵で、

その中で第一作業場(旧英軍南兵営…現マウントフェイバー(当時筑紫山といった))の裏側では、たちの悪い豪州兵の大尉がいた。朝から晩まで come on, come on…とわめいて追いまくられた。我々はカモン大尉と名付けて、将来、軍法会議者だと心で叫びながら忍従した。暑さと空腹と、重い鉄骨やセメント袋の集積には精も根も尽き果てた。四面楚歌の中で「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、有終の美を残して、祖国復興のために生きて帰る」を合言葉に、みなで長い一日、一日を生き長らえた。忘れることのできない言葉である。

6月になつて、中隊はじめ後続の各部隊も到着してきて、少し気が楽になつた。その頃、チャンギー刑務所では捕虜虐待の罪で日本兵が裁かれていた。昭和22年になつてチャンギーのゴム林を切り開いて、バラック兵舎を設営して移つた。ようやく鉄条網のバリケードがなくな



抑留者名札
(officer Kasuga-S とある)
忍従の汗が染み込んでいる



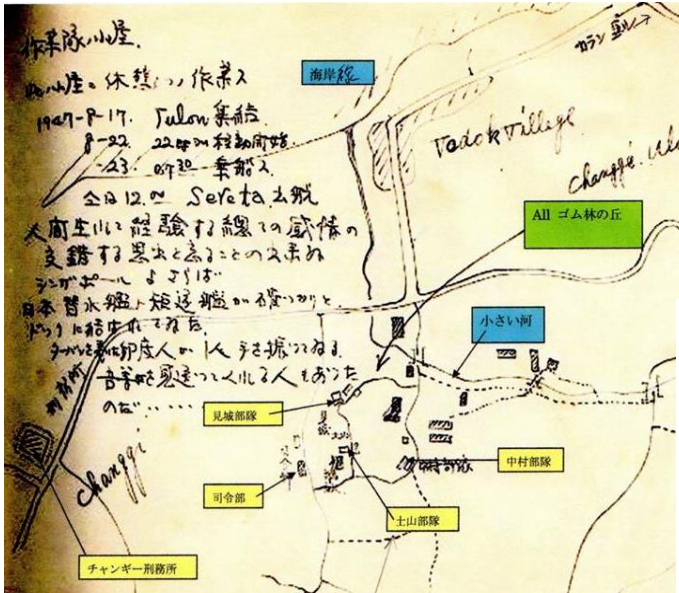
検問通過許可証
クルアンで受け取った戦犯チェックパス。このピンク色は通行を許可され、黒とグレーの者はキャンプに残された

った。周囲の土地を開拓してタピオカや食料になる野草を作った。

強制労働も少なくなつた。部隊名は各聯隊長の名前を付け、我々の電信第一聯隊は土山部隊といつた。たまに演芸芝居などできるようになった。

8月になると内地帰還の指示が出た。25軍の先遣部隊から、電信第一聯隊は私の小隊から、8月17日、ジユロンに集結。23日、日本から

チャンギー作業隊の地図



迎えに来た生き残りのお粗末な輸送船に、セレーター軍港から乗船した。港に繋がれた日本駆逐艦4隻の姿が目にしみた。

『ターバンを巻いたインド兵が一人手を振っている。我らを見送っている人もあったのだ。人間生きて経験する全ての感情の交錯する思い出を、忘れることのできぬシンガポールよ、さらば』

とメモが残っている。

終戦から、ちょうど2年たった昭和22年9月6日、佐世保港に帰還した。復員手続き後、各自方面別の復員列車に乗車して帰郷した。

●服装や装備

帰国した時の服装、持ち物は軍衣、ズボン、バンド、戦闘帽、夜戦用テントで作った手製のリュックサック、携帯テント。

ちなみに戦地での装備はバンドに軍刀、拳銃、手榴弾、凶囊(地図、書類入れ)を着け、鉄帽、防暑帽、ガスマスク、水筒、対空ネット、防蚊手袋などを携帯した。

作業隊では英軍支給の囚人服、囚人帽を着ていたが、帰還の時は軍服に着替えた。乗船時に英軍から3ポンド渡された(現在での3ポンドはおおよそ500円ちよつとだが、当時の価値の

程度は不明)。意味がわからないまま黙って受け取り、ポケットにねじ込んだ。

佐世保では復員局から800円もらって乗車した。それまで終戦からの2年間、金を持つたことはなかった。

●戦跡訪問

あれから約30年たった昭和53年8月、最初の戦跡訪問をした。バライガダイガラン村だ。戦時中は行く先々、村で困っていることに何かと援助した。河川交通はあったが、陸上の輸送手段がなく、作戦の合間に軍のトラックを使つてヤシ油のドラム缶などを運んでやった。ほかにも、けが人に赤チンを塗つてやったりした思い出がある。敗戦してからは何もできなかったから、何事も人のために、やれるときにやっておかねばならないことを痛感した。

バライガダイガラン村では、時が移り人が代わつたが、当時駐在していた小学校で、土地の有力者や学校の先生と生徒の演芸と踊りなどの歓迎を受けた。当時の兵補の一人が生き残っていた。祈り継ぐ、海外戦没者数246万人。戻らない遺骨は113万柱と言われる(二〇一四年現在)



現在のオーチャード通り

日系デパートも進出するシンガポール随一のショッピングセンターなど、高層ビルが並び地下鉄も走っている



著者近影（2015年12月）

注1…山下奉文

やましたともゆき（明治18年～昭和21年）は、日本の陸軍軍人。第二次世界大戦当時の陸軍大将。太平洋戦争の緒戦において第25軍司令官としてマレー作戦を指揮する。

日本の新聞はその勇猛果敢なさまを「マレーの虎」と評した。シンガポールの戦いの終結時に敵将イギリス軍司令官のアーサー・パーシバル中將に対して「イエスカノーか」と降伏を迫ったという逸話は一躍有名になった。

注2：太平洋戦争における日本の主要な戦争目的の一つに蘭印の石油の確保があったことは周知の事実である。

（ウィキペディアより）